

「主よともにいてください」(要旨)
聖書箇所：ルカの福音書24章13~32節

【1】 夕闇の迫るとき

主イエスが復活された日、暗い顔をしながらトボトボと道を歩いていた二人の弟子がいました。この二人は自分たちが望みをかけていたイエスが十字架刑に処せられ死んでしまったことに悲しんでいました。さらにこの日、仲間の女性たちが「イエス様が生きておられる」と彼らに告げたのでした。彼らはその証言に戸惑い、信じる事ができないまま、話し合ったり論じ合ったりしながらエマオ村に向かっていたのでした。そこに復活されたイエスが、「歩きながら語り合っているその話は何のことですか」(ルカ 24:17)と加わったのです。彼らはそれがイエスだと気づかず、自分たちの絶望した理由を説明します。イエスはそんな彼らにみことばを説き明かされました。イエスだと気づかないまま「一緒にお泊まりください…」(ルカ 24:29)と懇願する程に、彼らは一緒におられるその相手に、強く惹きつけられたのです。

【2】 「主よ、ともにいてください」

夕闇が迫る中、抛り所を失ってこれからのことを案じながらエマオに向かう弟子たちの姿。愛する人の死に絶望したり、また必ず訪れる死と向き合い恐れる私たちの姿と重なります。どんなに健康であっても、必ず訪れる死。避けて通れないのが、人生の夕暮れです。人生の旅路において死が間近に迫る時、私たちは何を考えるでしょうか。

19世紀の代表的な讃美歌の一つであり、英語圏で愛唱されてきた賛美歌に「夕闇の迫るとき」(教会福音讃美歌 430 番)があります。全ての節に「主よ、ともにいてください」という歌詞が出てきます。これは夕暮れのエマオに向かう道で二人の弟子が発した「一緒にお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いています」(ルカ 24:29)に由来します。同賛美歌の

作詞者ヘンリー・F・ライト(1793-1847)は、イギリス国教会の司祭としてイギリス南西部の教会で仕えました。肺結核が体調を崩し自らの死期の近いことを悟ったライトは、亡くなる数月前に告別説教を行い、聖餐式を執行し、そしてその夜この讃美歌を書き上げたといわれます。

「夕闇の迫るとき 頼りゆく身を支え
いつまでも離れずに 主よ、ともにいて
ください」(1節)

ライトは、まさに自らの人生の「夕闇の迫るとき」、復活の主イエスを見つめ、「主よ、ともにいてください」と記しました。

【3】 みことばが説き明かされる時

復活のイエスは、十字架の死に絶望したエマオ途上の弟子たちに現れ、みことばを説き明かされました。するとどうでしょう。不思議なことに、彼らの暗く冷え切った心が、火が灯されたように熱くされたのです！エマオ途上で彼らがイエスから聞いたことは、すでに耳にしたことのあることでした。しかし彼らの心が鈍く、そのすべてを信じられなかったのです。復活のイエスは、そうした者たちとともに歩き、みことばを説き明かされ、そして食卓に着いてくださったのです。イエスの裂かれたパンを受け取った時、彼らの目が開かれ、復活のイエスだと分かったのです。

イエスの十字架の死と復活を信じる者は、「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」(Iコリント 15:55)と、死が終わりではなく、その先にある永遠のいのちの希望に生きることができるのです。

▷一日のうちで最も美しく、同時に寂しさを覚える夕暮れ。そんな時、ともにいて下さる主を見出すことができたなら、どんなに幸せでしょうか。

